

華の書に載するものを、考出する事如左。

元史五行志曰。至正十年十一月冬至夜。陝西耀州有星墜于西原。光耀燭地。聲如雷鳴者三。化爲石形如斧。一面如鐵。一面如錫。削之有屑。擊之有聲。

本草綱目石部。霹靂礎。釋名雷楔。陳藏器曰。此物伺窺震處。掘地三尺得之。其形非一。有似斧刀者似判刀者。有安二孔者。一曰出雷州并河東山澤間。因雷震後得者多似斧。色青黑斑文。至硬如玉。或言是人間石造納與天曹。不知事實。李時珍曰。按雷書云。雷斧如斧。銅鐵爲之。雷礎似礎乃石也。紫黑色。雷鎚重數斤。雷鑽長尺餘。皆如鋼鐵。雷神以劈物擊物者。雷鑲如玉環。乃雷神所珮遺落者。雷珠乃神龍所含遺下者。夜光滿室。博物志云。人間往々見細石形如小斧。名霹靂斧。一名霹靂楔。玄中記云。玉門之西有一國。山上立廟。國人年々出鑽以給雷用。此謬言也。雷雖陰陽二氣激薄有聲。實有神物司之。故亦隨萬物啓蟄。斧鑽礎鎚皆實物也。若曰在天成象在地成形。如星隕爲石。則雨金石雨粟麥。雨毛血及諸異物者。亦在地成形者乎。必大虛中有神物使然也。陳時蘇紹得雷鎚重九斤。宋時沈括于震木

下得雷楔。似斧而無孔。鬼神之道幽微。誠不可究極。主治無毒。主大驚失心。恍惚不識人。并石淋磨汁服。亦煮服作枕。除魔夢不祥。藏器刮末服。主療疾。殺勞虫。下蠱毒。止洩泄。置箱篋間。不生蛀虫。諸雷物珮之。安神定志。治驚邪之疾。時珍。出雷書。

愚按元史の説は、雷斧なる事を不知して怪物として云。本草の説は雷斧の辨詳也。夫天地之間は一氣のみ。雷もあるべき物にして常に多し。何ぞ毎雷に斧楔あらんや。今天學に因て其辨をなす事如左。

夫太陽地を照して熱をなせば、其熱氣水土の氣を挾んで上昇す。天上に冷雲ある時は、是に圍まれて熱氣迫りて火團となる。然して冷濕の氣は降らんとし、火燥は昇らんとし東西に轉じて、雲の薄き方へ奔走して聲をなす。是雷也。その奔走の間、雲際に映じ閃きて光をなす是雷也。火氣上昇與天俱則和而爲雷。驟則散而爲電。夏日多雷者此謂也。然るに初め上昇する時は、火土俱に其氣のみ也。冷雲に裹まれて火土の氣迫る時に及んで、火は火の形をなし、土は土の形をなす。火土相親みて相助け、火を以て土を練て物をなす、是雷楔也。然るに雷に三種あり。

水雷は水氣勝て火土の氣負る故、物を不擊、其聲も不嚴。

冬日の雷多くは水雷也。是を洴雷と云。火雷は火氣盛にして電多く、其聲大に物を撃つて火跡を遺す。陰陽鬱怒の氣にして夏日に多し。是を燁雷と云。土雷は土氣大にして其聲嚴しく、物を撃つて損じ破る。是を鑽雷と云。雷楔は此鑽雷に在るもの也。下土の地和かなる時は、土氣柔にして楔をなす事なく、土地堅き時は土氣剛にして楔をなす。北之土。橫而平。則氣重而爲堅。其生人也壯而堅。南之土堅而峰。其氣流而爲靈。其生人也弱而秀。本邦北邊の地に雷楔あるも此道理か。其色或は紫黒、或は青黒、或は一面如鐵一面如錫も、其土色を帯る也。斑文あるものは、土氣不一相混する故也。其形品々あるものは、水火相激して形をなす故也。

凡物空中にて形をなすもの、其氣緩なるときは、雨露の如く圓体をなす。氣嚴なる時は夏雹に角ある如くにして、如雷楔者薄激の甚しき也。故に形不一。長じて平角なるものを雷斧と云。長じて尖りたるものを雷鑽と云。長じて丸きを雷鎚と云。丸く曲りたるを雷環と云。雷斧に或は穴あるは土の堅き所抜けたる跡也。斧鑽礎環俱に一物異形也。

論衡・五雜俎・雷書等に雷を以て有形の神物とす、可笑。

一、病狀等につき室鳩巢來書
拙者手足痛乎今不宜致難儀候。第一肩臂の痛は少和ぎ申様に候へども、兩手共に五指はれ候て指節痛難斗候。此間は食事の節箸持事も難成、終飯の間に二三度も取落し申躰に候。増して帯など自身に致候事は不能成候。足も足心痛且又膝難立候故、起居難儀に候。只今迄橋隆庵藥被下、二百服も給候得共、替儀無之候。老衰の上痼疾に成候故、誰藥被下候ても早速快くは有間敷候得共、最早年始以後半年餘も引籠、此後いつ迄引籠可罷在も不存候故、然れば西丸御側醫師中へ、終に爲見不申儀いかゞに存候。もし西丸にて御側衆など、たづねも候時分、西丸醫師中不存候と申も不都合に候故、隆庵へ其段申入、只今井關玄周藥被下候。是は井關支節子息に候。只今西丸御側醫師中御さじにて候。其元林伯龍など親類にて候。是も老人の上殊の外羸瘦に見候間、畢竟人參を用ひ不申候はでは不成候得共、先づ只今の内は了簡の藥有之間、人參不入に用候様にとの事にて、もはや七八貼も被下候。何ら替る儀も無之候。食は只今一日

必ずしも不辨可也。

有澤致貞 記